

【連載 ニッポン核武装の疑惑を追う】第4回

『隠して核武装する日本』を出版／核武装推進議員が増加

自民党国会議員九〇人

柳田 真

一 榎田敦さん(元理化学研究所 元名城大学教授)を代表とする「核開発に反対する会」は二〇〇六年秋から二〇〇七年夏の六回の講演、討論集会の成果を集成して、本を発行しました。『隠して核武装する日本』(一九〇頁、一五七五円)です。執筆者・内容は次のとおりです。

榎田敦「核武装を準備する日本」／藤田祐幸「戦後日本の核政策史」、補論1「原爆で戦争が終わったのではない 久間前防衛相への反論」、補論2「中西輝政の核武装論 日本の「右翼」はどのような軍国主義を考えているのか」／山崎久隆「核」攻撃とミサイル防衛」／井上澄夫「核武装論議」の解禁が私たちに問うもの」／原田裕史「平和のための核兵器 Atoms for Peace」／望月彰「東海村臨界事故と核開発」／渡辺寿子「日本の科学者は再び核兵器開発に手を染めないか」／中島哲演「序 フルトーとフツダ」／柳田真「日本核武装の疑惑を追う市民の活動 あとがきにかえて」／「核武装」推進議員が増加」核武装推進・容認国会議員リスト

二 この本は「原子力の平和利用」「原子力発電」を隠れ蓑にして日本が核開発(核兵器「原爆」づくり)を進めてきたことを、歴史的な面(戦後も戦前も)からも、日本の現有的原子力技術の実際上からも、そして政府要人の発言からもそれぞれ分析しています。

三 二〇〇六年一〇月の北朝鮮の核実験を絶好の好機に、超タカ派・安倍内閣の成立をバックに、保守右派政治家・論壇がこぞそとばかりに「日本核武装論」を提起しました。中川一郎自民党政調会長(当時)、麻生太郎外相、中曽根康弘元首相らです。この日本核武装論は日本保守勢力内に深く大きい人脈と勢力をもっていて、その時々々の政治情勢をとらえて、間欠泉的に吹き出していきます。根が深く、日本の将来に関わる重大な問題です。

四 一方、これに対抗する民衆の側の議論(理論武装)と運動は残念ながら全く乏しい。討論の場も本(書籍)も私たちの知る限りほとんどない現状の中で、ささやかながら、私たちの努力が実って一冊の本『隠して核武装する日本』

になりました。

三 本が好評、売れ行きも順調

二〇〇七年一月に発行した『隠して核武装する日本』が好評です。他に類書がない(私は知らない)こともあり、売れ行きも順調です。本の題名を考えたのは小若順一さん(食品と暮らしの安全)、表紙のデザイン、色彩は鈴木干津子さん(たんぼほ舎)、全体の諸雑用は東京北区の影書房の松浦さん。影書房は鎌仲ひとみ著『ヒバクシャ』などの本の出版がある。挿絵の橋本勝さん、推薦文が小出裕章さん(京大)、初版は二〇〇〇部発行です。

四 書評もいくつか 図書新聞、社会評論、インターネットJANJAN

『隠して核武装する日本』の書評が図書新聞、社会評論などに載りました。樋口篤三さん(日本労働ペンクラブ)執筆の「原発と核兵器は一つのもの」行動を迫るすぐれた問題提起(「図書新聞」一月一九日号)、中村泰子さんの書評は季刊雑誌「社会評論」(冬号)に掲載。本の簡単な紹介はインターネット新聞「ANJAN」。

五 三月二日(日)午後出版を祝つ会 会場は東京学院 私が開係して出版した本は一冊目が『東海村「臨界」事故 国内最大の原子力事故。その責任は核燃機構(旧・動燃)だ』(高文研から出版)です。この『隠して核武装する日本』は二冊目。三月二日(日)午後一時～五時、出版記念会を東京学院(JR水道橋西口徒歩二分)で行います。中身は鎌仲ひとみさん(映画六ヶ所村ラプソディ、ヒバクシャの監督)と榎田敦さんの対談、交流・懇親会(参加者各人の三分発言)など。ご参加いただくとつれい。

六 特殊原子炉もんじゅ運転「再開」に反対する署名を多くの呼びかけ人の協力・共同で始めています。

一月二日現在の数字は呼びかけ人一九〇人、署名者数七一六人、兵器級プルトニウムを作る軍用炉もんじゅの再開をくいとめることは日本核武装阻止の重要な課題です。是非多くの人の署名への協力をお願いします。